

マタボールたちと在地の農村開発

——バングラデシュ、ドッキンチャムリア村における
アクション・リサーチの記録——

安藤和雄,* 内田晴夫,**
ハビブール・ラーマン,[†] アルタフ・ホセイン^{††}

Matabbors and Village Development : An Account of Action Research in Dakhsin Chamuria Village, Bangladesh

Kazuo ANDO,* Haruo UCHIDA,**
Habibur RAHMAN[†] and S.M.Altaf HOSSAIN^{††}

A village development committee was established to look after rural development activities that were initiated by joint efforts of villagers of Dakhsin Chamuria village in Tangail and staff members of the JSRDE project team. The committee is formed of the so-called traditional village leaders, or *matabbors*, some of whom proved to be active in enhancing villagers' unity and devotion to village public affairs. Cases showing the active role of *matabbors* are also presented. At the same time, two-tier coordinating bodies of local government officers were formed on an experimental basis for the JSRDE, at Thana and Union levels respectively, to coordinate the activities of the line departments concerned in rural development. The Thana Rural Development Officer (TRDO) and the Assistant Rural Development Officer (ARDO) played pivotal roles in organizing the respective bodies.

An effort is being made to "link" the organizations of local governments and the village development committee, so that the governments' rural development services are channeled into the village through the public, formal "door" of the village. Various trials so far implemented in the village indicate that successful linkage hinges upon the single facet of "openness" or "transparency" in information dissemination, which had been rather lacking in rural Bangladesh. All the important processes of formulating the village committee and the coordinating bodies of local governments and clues for successful communication and dissemination of related information are documented in detail in this paper.

* 京都大学東南アジア研究センター；Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

** 農林水産省四国農業試験場；Shikoku National Agricultural Experiment Station, Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries, Ikano-cho, Zentsuji, Kagawa 765, Japan

[†] Department of Agricultural Economics, Bangladesh Agricultural University, Mymensingh, Bangladesh

^{††} Department of Agronomy, Bangladesh Agricultural University, Mymensingh, Bangladesh

I はじめに——農村開発の視点と問題——

筆者らがドッキンチャムリア村(以下D村と記す)において行なっている農村開発のアプローチの基本姿勢を一言で言いあらわすならば、村びとの経験の蓄積と彼らが作ってきた村社会を積極的に肯定することで、農村開発プログラムへの村びとの参加を引き出そうとしていることである。具体的には、村という「在地」¹⁾に生活しているリーダーたち(マタボールとD村では呼ぶ)の存在を肯定し、「在地の技術」や「在地の社会」の牽引者である彼らの役割や、彼らが持っている「村の権威」とともに、村びとの「同じ集落に生活してきた(している)」という「村意識」とを農村開発に活かすことである。

筆者らがこのような考え方をもつようになったのは、D村におけるリーダーたちの様々な役割に直接触れたことが契機となっている。たとえば、D村の人々がリーダーたちの指導力のもとに洪水から村を防ぐために堤防を守った共同活動や、小学校・定期市の設立、救援物資の分配活動などがあげられる。一方、一部のリーダーたちがビール(沼)の権益を独占しようとした際に、村びとたちがそれに厳しく反対したチェック機能には驚きすら覚えるものがあつた。

在村のリーダーたちは、バングラデシュの農村開発の現場では従来あまり高く評価されていない。それは、バングラデシュがまだ東パキスタンであった1960年代につくられた「コミラモデル」において、在村リーダーたちが「否定」されたことに始まる[安藤 1994]。その影響を受け継いだバングラデシュの農村開発アプローチにおいては、在村のリーダーたちは貧しき村びとたちの農村開発プログラムへの参加の機会を阻害こそすれ、リーダーとして彼らを引っばっていく存在ではない、言うなれば憂うべき存在であるという烙印が押されている。

さらに、「貧困の撲滅」が政府、NGOを問わず、今日、バングラデシュの農村開発の第一のプライオリティである以上[Planning Commission *et al.* 1994: 23-28; Planning Commission 1990: VII, 1-4], 多くの場合村の富裕層である在村のリーダーたちの存在を肯定することは、バングラデシュ型農村開発の「常識」に反することになる。

ショニルボール運動²⁾が起きた一時期を除き、「コミラモデル」以来現在に至るまで、村びとの直接参加を目指した農村開発プログラムの特徴は、グループやショミティ(組合)を通じて

- 1) 「在地」とは、もともとは「住んでいる土地」という意味であるが、本稿では「その土地にすんでいる人々が歴史的に育んできた」という意味を込めている。
- 2) ショニルボールとは、農村自立運動のこと。1975年9月24日に元 BARD (Bangladesh Academy for Rural Development: コミラ農村開発アカデミー) のマハブブ・アローム・チャシー (Mahbub Alam Chasi) によって開始されたプログラム。コミュニティ・ディベロップメント・アプローチによる農村開発の手法である。故ジャウル・ラーマン大統領の支援を受けて全国に展開された。村落政府(グラム・ショルカル)の制度のモデルとなった。政権の交代で村落政府は廃止、運動は下火となる。詳しくは[Saqui 1994: 18-70]を参照。

行われる研修や貯蓄と資金融資、農業技術普及などの行政サービスへのアクセスなど、いずれも村びと個人を対象としていることである。計画段階から村びとの共同的な参加を必要とするインフラ整備事業などは、農村開発プログラムとしては企画されていない。このようなプログラムでは、村びとの仲間意識あるいは「村意識」が個人の参加意識とともに要求されると同時に、集落間の調整が必要となる。在村のリーダーの役割が期待されるような農村開発プログラムは意識的に避けられてきたとも言えるのである。

一方、行政³⁾をはじめ、NGOも含めて、村の外の機関や組織によって農村開発プログラムが投入されるケースはきわめて多い。たとえば、農業普及プログラムなどの行政サービスがあげられる。村の外の機関や組織がどのように村に入り、村のリーダーたちや一般の村びとと接していくか、また村びとの参加意識をどのように促すことができるかは、バングラデシュの農村開発の基本的課題である。

以上の問題意識に基づき、D村では村落委員会を設立し、1992年、1993年とインフラ整備を中心に様々なプログラムを実施してきた。また、1993年の10月からは、D村の属するユニオンにユニオン連絡会議を設け、行政機関と村及び村びととのリンクに関するプログラムを展開している。本稿の目的は、D村をベースとしたこれらのプログラムの実施例を通して、個人の経済的發展を中心においた既存の農村開発の手法に対し、在村リーダーと村意識を基盤にした「もうひとつの手法（an alternative approach）」の必要性和可能性を明らかにすることにある。

本稿では、まずII章で、D村の村びとがリーダーたちのイニシアチブによって起こした農村開発プログラムとリーダーたちのD村社会における役割を素描し、そこから学んだことを述べる。次にIII章とIV章では、D村で行われている村落委員会の設立と行政サービスとのリンク、回覧板と掲示板、道路整備の各プログラムの実施状況を詳しく紹介する。最後にV章では、以上をまとめて筆者らの目指す「もうひとつの手法」を「在地化した農村開発」として提案する。

尚本文中の敬称は省略した。

II D村のマタボール

1. 村落単位とマタボール

バングラデシュの村（village）の単位は、モウザ（*mouza*）またはグラム（*gram*）と呼ばれる。前者は地租（land revenue）を集めるために作られた地籍図によって地理的な範囲が決定されている単位であり、後者はそこに生活している住人が、自分たちの生活感覚に基づいて使

3) 本稿で用いる「行政」は、公務員によって運営される行政機関の活動に限定し、政治機関を含まないことにする。

う地理的な範囲である。⁴⁾

D村のモウザの名はドッキンチャムリア (Dakhsin Chamuria) であるが、グラムとなると、モウザの単位で示される集落をドッキン・チャムリア・グラムと言うこともあるが、チャムリアとマンドゥリア (Mandria) の2つのグラムに分けることもある。しかし、グラムよりも小さい村落単位であるパラを用いて表現する時は、マンドゥリアはドッキン (南) パラであり、チャムリアはウトール (北)、モッドム (中)、プルボ (東) の3パラからなる。そして、この北、中、東、南の4つのパラがドッキン・チャムリア・グラムを作り、その範囲はドッキン・チャムリア・モウザに一致している。しかし、マンドゥリアのマタボールたちは、長年、自分たちのグラムは独立したマンドゥリア・グラムであり、マンドゥリア・モウザとして政府に認めてもらいたいという運動を展開している関係から、マンドゥリア・グラムと呼ぶことが多い。このことは、1980年にジアウル・ラーマン大統領政府によって一時期設立されたグラム・ショルカル (村落政府) が、D村では、チャムリアとマンドゥリアの2つのグラムに別個に設立されたことからもうかがえる。

D村の村びとは、村の地域をグラム、パラ、パラを構成するチャクラ (*chakla*)、チャクラを構成するバリ (*bari*) に区別している。バリとは、グスティまたはショリックと呼ばれる父系血縁のグループに属する者が中心となり、隣接する屋敷地によってできた集落を構成している単位である [河合・安藤 1990]。グスティの他に、D村には地縁や血縁でもないが、誰もが認めるグループがある。それをショマズという。ショマズは、冠婚葬祭やイードなどの宗教に関係する行事を一緒に行なったり手助けし合う、20から30前後の世帯 (カナ) が構成するグループである。ショマズのグループの広がり、地縁や血縁に影響されるが基本的には、バリやパラの単位にもとらわれない地理的広がりをもっている。

D村では在村のリーダーであるマタボールは、果すべき役割と影響力の範囲から特にショマズのマタボールとグラムのマタボールに区別される。⁵⁾ 1989年には23のショマズのグループが存在し、各ショマズには2人から4人のマタボールがいた。グラムのマタボールはショマズのマタボールとは異なり、村での出来事一般に関係している、いわば村の顔役のような役割を担っている。彼らはパラに散らばっていて、あたかもパラの代表のように分布している。ショマズ

4) 行政が行う農村道路の整備などの農村開発計画ではモウザの単位の村 (village) が把握され、協同組合 (*samabai samity*) などの設立や普及などのように人を相手とする農村開発事業ではグラムが使われたりする。モウザとグラムの地理的範囲は一致することが多いが、一致しないことも多い。

5) マタボール (*matabor*) の英訳は「influential, chief (以上形容詞), leader, head man (以上名詞)」。この他にもリーダーに相当する存在にショルダール (*sardar*) がいる。ショルダールは、マティ・カタドール (土木工事の日雇い人夫の集団) のリーダー (まとめ役) などに使われる言葉で、「leader, chieftain, gangman」と英訳される。D村のリーダーはマタボールを指し、ショルダールではない。グスティにもマタボールはいる。グスティのマタボールは血縁の代表という意味合いが強いが、ショマズ、グラムのマタボールと重なっていることが多い。また、パラ内の出来事にのみ影響力のある人々をパラのマタボールと呼ぶ。パラのマタボールはショマズのマタボールにほぼ一致している。

のマタボールにしるグラムのマタボールにしる、村の集会（ショバ）で正式に決定された人々ではなく、きわめてインフォーマルに、日頃の活動のうちに村びとたちにマタボールとして認知されている人々である。

村の開発に大きく関わってくるのは、グラムのマタボールである。グラムのマタボールと言われる人たちは、1989年の時点で、北パラに6人と東、南パラにそれぞれ3人の計15人であった。そのうち、近村のもめ事などの裁定（ビチャール、後述）にも出かけるマタボールは13人を数えた。以下断りのない限り、マタボールとはグラムのマタボールのことである。

2. マタボールと村の「公（おおやけ）」

在村のリーダーと書くと、経済的・学歴的に秀でた人たち、村のエリートというイメージを受けがちであるが、金持ち、土地持ち、学があるという条件がマタボールとなる必要条件では必ずしもない。土地所有規模が1エーカー（0.4 ha）以下も珍しくなく、ごく少数ではあるが文盲のマタボールも存在している。年齢的には40歳前後から上が多い。⁶⁾「村でも上層の家」とか「父親の姿を見て教えを受けるから」などの理由を村びとはあげるが、1989年に23人のショマズのマタボールに聞き取りを行なったところ、16人はマタボール自身の父も祖父もマタボール経験者であった。但し、家督的にマタボールが相続されるものではないと言われている。彼らが他の一般の村びとよりも抜きん出ていると思われるのは、概して「情報」に明るいことと、「弁がたつ」、「仲裁がうまい」ことである。弁舌にたけていることは、有力なグラムのマタボールになるための不可欠な資質である。

マタボールは、村びとの誰と誰の仲がよい、悪いなどという「個人的な事情や興味」にも精通していることは勿論であるが、村の常識にも絶えず気を配っている。つまり「村の世間」に明るい。同じ村に生活しているという「村意識」を感覚的にも強く意識している存在である。

この「村意識」や「村の世間」とは、村の皆が当然のこととしている、私（わたくし）のない、村の「公（おおやけ）」という意識である。⁷⁾ マタボールは、村びとの中に「村意識」や「村の世間」という「公（おおやけ）の意識」を煽ることで、自らの存在意義を示しているとも言える。具体的には、マタボールたちが村びとを説得する時に、「村の社会（グラメル・ショマズ）

6) D村の在村リーダー27名の聞き取り調査によれば、年齢の平均は52.3歳(45歳以下5人、46～55歳9人、55歳以上13人)、学歴は文盲2人、クラス1～5年11人、6～10年5人、中学校卒業認定合格者9人。主な職業は農業22人、サラリーマン(小学校の教員など)4人、商売1人。耕作土地所有規模は1エーカー未満8人、1～3エーカー11人、3～5エーカー5人、5エーカー以上3人であった[JSARD Project Team 1990: 65]。

7) 公(おおやけ)は、国家とか政府の意味にも使われるが、本稿では、「社会や世間、表だったこと、公然、私有でないこと、公共、共有、私心のないこと、公明、公正」の意味で用いている。これは、英語の public のもつ「belonging to the people as a community, of the people, by the people, for the people, not private, the general body of the people」の意味に近い。ちなみに、この意味の public のベンガル語訳は「ジョノシャダロン (the people at large), ショルボシャダロネル (common to all)」である。

……」(このショマズは宗教的なグループのショマズとは異なり社会という意味をあらわす。単語は同じ)とか「自分だけのため(ベクティル・ジョンノ)ではなく、村の皆のために(グラメル・ショパイル・ジョンノ)……」「10人のために(ドシュ・ジョンネル・ジョンノ、10人とは皆という意味)……」,「この地域のために(オツツロ・エラカル・ジョンノ、この地域とは隣接する村々)……」⁸⁾ という決まり文句をよく使う。このようなマタボールの資質は、村びとが個人的に起こしたもめ事の解決や、小学校の設立、道路建設などの農村開発にいかんなく発揮される。マタボールの説得の基準は、「村の皆」という村の「公」が建て前なのである。

マタボールたちは村びとの「村意識」である「公」に訴えることで、農村開発や福利厚生に関連する事業や行事をD村で行なってきたが、マタボールの役割が村の公的な場で発揮される一番わかりやすく、かつ重要な行事はビチャールまたはシャリシュと呼ばれる村の裁判所の機能を果たしている寄り合い(英語では village court と訳される)の場においてである。ビチャールでは、マタボールたちは調停役もしくは判事役という権威を村びとから与えられている。したがって私心のない「公」のものであるビチャールの決定には、村びとは従わなければならないという建て前が、村の習慣として昔から受け継がれてきている。マタボールは「村の公的な権威」であると同時に、ビチャールでは、しばしばマタボールに個人的に追随する人々の代弁者ともなる。マタボールの私的な人間関係が、彼らの村の中での権威を一方で支えているのである。

3. ビチャールにみる村の意志決定の方法

パラ内の小さなもめ事は、ビチャールまでは至らずもめ事を起こした当事者がパラのマタボールらと話をして何となく収まっていくことが多いが、事が大きかったり、当事者がパラを越えて存在していたりすると、村レベルでビチャールが開かれる。このようなビチャールは年に数度である。

例えば耕地の境界線をめぐっての争いが村内で起きたとする。すると、争いを起こした当事者がマタボールたちのところに出向き、ビチャールを開いてもらうように依頼する。出席してもらうマタボールたちを当事者の間で決める場合もあるが、はじめに相談に行ったマタボールが主要な他のマタボールたちの出席を願い、当事者がそのために奔走するということもしばしば見受けられる。

ビチャールは、昼間の仕事を避けて夜または朝に行われることが多い。もめ事を起こした当事者たちがマタボールたちを囲むように座る。マタボールは当事者たちの代弁者であり、かつ、判事、証人という役割を担っているので、複数の主だったマタボールの出席が必要となる。ビ

8) 本稿で用いているベンガル語の表記は、筆者らのうちの日本人が自分たちの耳で聞き取ったものをカタカナに直したものであり、英語表記からカタカナに直したものではない。

チャールには、当事者の他に当事者の親戚や仲間が加わり、関係のない村びともギャラリーとして傍聴する。

一度のビチャールで話がつかず、何度も日を改めて開催されることも珍しくない。話が込みいってきることが大きくなったり、大きな傷害事件など、はじめから村内のマタボールだけでは手に負えないような場合は、近村の有力なマタボールたちが裁定役に招かれる。またビチャールがもつれた時には5～7人の奇数のマタボールたちのみで構成されるジュリと呼ばれる話し合いの場が持たれ、多数決によって解決がはかられることもあると言われている。

このビチャールの様式が、D村の「村の意志決定のやり方」でもある。一人の強力なリーダーがすべてを握っていたり、または、長老のような一人の「村長」がいて、最終的には彼の判断を仰ぐという形式となっていないのが、D村のマタボールたちの物事の決め方である。最終的な判断はマタボールたちの協議によって決まる。言うならば、制度的に定められた会議ではないが、マタボールたちの話し合いの承認を得ずしては、村の合意とでも言える「公性」は獲得できない仕組みとなっている。

4. 農村開発におけるタウト (tout) としてのマタボール

村内でのビチャールにおける仲裁者という他に、マタボールたちの役割は、村外の主だった人や農村開発のプログラム（農業普及などのいわゆる行政サービスも含めて）の実施者である組織・機関との連絡、折衝があげられる。1988年の調査によれば [JSARD Project Team 1990: 66], 質問に答えたマタボールの7割以上が、月に最低一度はタナの役所に出向いていた。マタボールたちは一般の村びとに先立って、世の中の趨勢や政府・NGOの関心はどこにあるのかという「情報」の収集に努めているのである。また、ほとんどの地方行政やNGOの機関・組織が村で何らかのプログラムを開始しようとする時に、村の事情に詳しいマタボールに個人的に事情を聞くことから始めることが多い。マタボールにとっては、プログラムの存在を一般の村びとに先んじて知り、利益を個人的に独占することが可能である。したがって、頭が働き、ずる賢いマタボールは利己的に動き、恩恵を一人占めにする。このようなマタボールの特権とも言える側面を、農村開発関係者は「タウト」と批判するのである。⁹⁾

9) 「タウト」という言葉をもっとも耳にするのは、政府系協同組合が何故うまくいっていないかという時の説明においてであろう。村の組合の責任者であるマネージャー（専務理事）が、村の「タウト」に占められているとか、はじめは「タウト」ではなかったが「タウト」になってしまったからだという批判を、政府系協同組合を指導してきたBRDB (Bangladesh Rural Development Board: パングラデシュ農村開発公社) の関係者からよく聞く。その背景には、マタボールとは村の権力者であり、自らの経済利益のために利己的に動き、絶えず村外から与えられる「発展の機会」を独占してしまうという意味合いが込められている。

D村の人々があのマタボールは「タウト」だと言う時は、「合意した約束の言葉を守らず、都合によって言葉を翻したり、村の政治的な人間関係の駆け引きの中で、ずる賢く立ち振る舞い、一般の村びとに

5. マタボールたちの特権をチェックする「情報の公開」

D村のマタボールたちの特権の行使は、時に一般の村びとの強い反対に遭う。そのよい例を示しておこう。

1978年のことであった。D村の有力者であるマタボールのH氏は、前々からカーシ(Khas: 政府の土地)である村のビール(沼)は政府からリースを受けることで、やがては払い下げになることを知っていた。それを狙って、他の5人の有力なマタボールとともにリース申請書を提出した。彼らはこの件を秘密裡に行なったが、それが漏れる事態となった。すぐに村の全体集会(グラメル・ショバ)が他のマタボールたちによって召集された。多数の村びとの意志として、この申請に反対する嘆願書が政府(当時は軍裁判所)に提出された。反対の理由は、ビールが村びと全員の沐浴の場所であることと漁撈権を独占されることを恐れたからであった。現在この件はペンディングとなり、ひとまずは収まっている。この例が示しているように、D村では「情報の公開」によってマタボールの独断的行動がチェックされる仕組みとなっているのである。

III マタボールたちによる農村開発の経験

1. ロハジョン川堤防決壊防止のための近隣村合同労働奉仕の取りまとめ

1988年の8月から9月にかけて、バングラデシュ全土は100年に一度と言われる大洪水に襲われ、D村もその例外ではなかった。

アシャール月(ベンガル暦の第3月: 6月中旬から7月中旬)の下旬の朝、すでに日が昇った7時頃であった。D村のマタボールの中でもリーダー格のムッラの家へ、モヘラ村のマタボールたちが「ロハジョン川の激流がまさに堤防から溢れ出そうになっている。このままでは堤防が決壊する」と知らせにやって来た。顔を揃えたマタボールたちは、エレンが高校の先生であるロシッド・マスター、ユニオン評議会の議員(メンバー)であるモティン・メンバー、ノズル・メンバー、モヘラ村のアッケル・アリであった。

ムッラは、村のマタボールたちを集めるべく、すぐに使いの者を走らせた。やって来たマタボールは、コンドカール・コリルル・ラーマン、高校の先生のヤシン・マスター、アッケル・アリ、ハミッド、小学校の先生のハビブール・ラーマン、マイエン・ウッディン・マスターらであった。

このまま放置してはチャムリアは勿論のこと、マンドゥリア、コルシラ、ブクタ、パニアフィ、ババニプール、チナムラの近隣の集落(グラム)の作物がやられてしまう。すぐにでも、

↘「入れ知恵をして村の中で問題を起こす者」のことである。つまり、人を騙し、「公」がなくなって、村の中での政治的権力の拡大ばかりを狙って動くようなマタボールを指す。

どんな方法を使っても、各々の家（バリ）から一人ずつ労働奉仕に出てもらわなければならないとの結論が出た。すぐさま村の人々を一堂に集め、説得がはじまった。そしてすべてのマタボールが連帯し、ロハジョン川の堤防の土盛りに出かけた。D村から300～400人、モヘラ村からも300～400人、その他の村々から合計1,000人の人々が集まった。所かまわず削りとれる所から土を取り、堤防に盛った。この作業は3日間続けられた。モヘラ村の人々は3日間、その他の村の人々は丸1日働いた。そして、ロハジョン川の決壊は免れ、D村周辺のアウス稲、アマン稲（深水稻）、ジュートを守ることができた。

このような対応はこの時が初めてではなく、しばしば経験することであった。自然災害という危機的な状況に対しては、他の村との連携のために村びとの代表となり村びとをまとめることは、マタボールの重要な役割の1つである。

ただし、この年には8月下旬から9月上旬にかけて2度目の大增水があり、これは村びとたちのいかなる対応も許さないほどの早さと規模であった。D村一帯の作物は全滅した。

2. 農村開発のための村落開発委員会の設立

1979年、ジアウル・ラーマン大統領時代にショニルボール・プログラム（農村自立運動）の一環として、グラムを単位としたグラム・ショルカル（村落政府）がつくられるらしいというニュースが村に伝わると、当時ユニオン評議会の議員であったマタボールのムツラは、自発的にチャムリアのマタボールに呼びかけて委員会を組織し、チャムリア村落開発委員会（グラム・ウンノヨン・コミティ）と命名した。構成メンバーはいずれも北、中、東の各パラのマタボールたちで、実質的にはマタボールたちの話し合いの場であった。

この委員会は、年3回ほど小学校の校庭で会議を開いた。年の最初の会議は雨季の近づいた5月に開かれ、竹橋の修理について話し合われた。竹橋の修理には毎年1,000タカの予算がユニオン評議会から援助されることになっており、その予算の使途については議員（メンバー）が責任を持たされていた。村落開発委員会の決定は、チャムリアの属している選挙区（ワード）から選出された議員を経由してユニオン評議会に伝えられ、議長の指示によって書記が労働者を雇い、竹を調達する。全額が修理のために使われるわけではなく、残金は委員会の提案によって、学校の修理などにも使われた。第2回目の会議は雨季の去った12月に開かれ、洪水被害を受けた道路の修復について議論された。道路の修復については、一般にユニオン評議会が各選挙区の議員を通してFood For Worksの仕事を割り当てる。第3回目の会議は、乾季稲作（イリ・ボロと呼ばれる）の灌漑がすでにはじめられている2月にSTW（Shallow Tubewell：浅管井）とDTW（Deep Tubewell：深管井）灌漑の調整をめぐって開催された。他にもこの村落開発委員会は礼拝広場、モスクや村の墓場などの修築なども手がけた。

この委員会が設置される以前は、ユニオン評議会の議長と議員だけが合法的で実質的なオピ

ニオン・リーダーとして権威づけられた存在であり、D村の意見形成のためのいかなる制度も委員会も存在せず、ユニオン評議会の議長や議員との個人的つながりだけが村落開発に関わる唯一のチャンネルであったと、あるチャムリアの委員は指摘している。毎月定期的に開催されるというほど、活発な活動を村落開発委員会が行っていたわけではない。むしろ必要に応じて、マタボールたちが集まって相談をするというのが実情であったろう。しかし単なるマタボールの話合いの場が、「村落開発委員会」という形式を持ったことによって、マタボールたちに「村の公（おおやけ）」という意識を浸透させたことが重要であった。

3. 村の小学校の建設

他の多くの村と同様に、1947年以前にはD村に近代的な教育施設がなかった。D村の小学校は、ヒンズーの地主が土地を処分するのに際して、数人の若者がその土地に夜間学校を開くことを希望し、それが認められたことに始まったと言われている。ところが、東パキスタンとしてインドから分離独立するときに起きたモスリムとヒンズーとの対立の機会に乗じて（ヒンズーたちが、東パキスタンを去らざるをえなくなった）、モヘラ村のあるマタボールが、夜間学校として使用していた建物を購入し、それを持ち去ろうとした。このことは夜間学校を続けることを強く望んでいた村のリーダーたちや青年たちに失望を与えた。このマタボールは、学校の運営委員会をタンガイルの裁判所に訴え出て、裁判となった。第一審は夜間学校側に好意的な判決が出たので、マタボールはマイメンシン控訴裁判所に控訴し、判決差し止めになった。これに対して、サブドゥール・ムッラとエンタズ・アリ先生がダッカ高等裁判所に控訴したが、判決を待たずして、サブドゥール・ムッラが死去した。しかし、氏の息子を含んだ村のリーダーたちは高裁で勝訴するまで闘い続け、ついには土地が学校の名義で登録されるに至ったという。

このようにして、この夜間学校は地主側と学校側の長い争いの後に安定的な地位をえることになった。学校は村びとたちによって設立された「ドルモ・ゴラ」（寄付による基金）によって運営され続け、後にマドラサ（イスラムの宗教学校）へと変更し、1952年から1971年のバングラデシュ独立まで運営されていた。

バングラデシュ独立後、2,200人以上の人口を抱えるD村では小学校の建設が必要と考えられるようになり、マドラサを政府の小学校に昇格させる運動が起こった。この運動のために使われた交通経費18,000タカは、村びとからの寄付によってまかなわれたと報告されている。やがて彼らの運動が実り、1978年には政府の小学校として認可されて現在に至っている。

小学校設立にいたる経緯は、「公の利益」に対する村びとの連帯の強さをあらわしている。裁判を支持して「村の利益」を得るために闘った彼らの姿は、圧倒的な災害に出会った時と同様に、危機的状況における村びとの結束力の強さをあらわしている。そして結束力の核となったのが、マタボールたちであった。

4. 村のハット（定期市）の開設

D村におけるハット開設の話は、村のマタボールのムッラによって提案された。1986年3月、彼はチョキダールを派遣して、近隣の7村の人々に声をかけ寄り合いを開いた。出席者の大部分は村のマタボールたちであった。ムッラは、D村の西のはずれ、隣村との境の広場にハットを設置し、試験的にやってみることを提案した。決定は、次の寄り合いまでに各マタボールが各村の考えを持ち寄ってからすることになった。次の寄り合いでハットの開設が決められるとともに、設置に関わるいくつかの必要事項を決めるための委員会が組織された。こうしてハットは計画どおりに開設され、以後、毎週土曜日の午後にここで開かれている。

ハットは順調に発展し、いまだ正規に登録されていないものの、開設8年を経過した現在では薬屋やよろず屋、床屋など数軒の常設店もできている。1994年8月17日、ハットに通じている道の入り口で来訪者（売り手も含む）の調査を行なった時には、天候に恵まれたこともあり、32村から1,946人の人々が集まってきた。1994年9月24日の販売品の運搬調査では、151人の人が頭の上に商品を乗せて徒歩で、12人がバンと呼ばれる3輪のリヤカーで、12人が自転車で運んでいる。マタボールたちの地域経済のもつ「公益」的な側面への洞察と先見性が、実を結びつつあるようだ。

5. 救援物資の分配

村の古老たちに飢饉の食料救援物資の分配方法について、過去の事例などを振り返ってもらった。

1942年（これは恐らくベンガル地域に大飢饉のあった1943年と思われる）に、ユニオンを3ブロックに分割し、各ブロックごとに食料委員会ができたとのことである。ドッキンチャムリア村も隣接の4村とともに1つのブロックを形成し、そのブロック内に村のマタボールによって選出された会長、副会長、書記と4人のメンバーからなる実行委員会がつけられた。大飢饉の間、救援物資が分配網に乗って全国的に配られた。サブディビジョン（現在のDistrictの単位の広さをもつ）の食料委員会から各ユニオンの食料委員会に救援物資が配給されると、ブロックの委員会のメンバーが村の一軒一軒をまわって、救援物資を配っていたという。

1962年、基本的民主プログラム（Basic Democracy）のもとにユニオン評議会が設立された。以前からの食料委員会は廃止され、ユニオン評議会が救援物資の配給義務を荷うことになった。救援物資の受取責任を負うマタボールが各パラから一人ずつ選ばれ、パラの他のマタボールらと協力して責任を果たした。このような、政府による救援物資の配給を通じたマタボールの地域的なネットワークは1983年まで続いた。

ユニオン評議会の選挙に派閥抗争がからんだのは、エルシャド政権下で行われた1984年の選挙が最初である。その時は村の派閥（ドール）によって投票が牛耳られた。この新しい現象は

村における社会、経済に重要な影響を与えるものであった。それ以後、議員は自分たちの派閥の中から救援物資の配給を受ける者を選ぶようになり、こういう傾向は今も見られる。

初期の救援物資配給システムでは、村の中で力と地位を持ったマタボールがその個人的な資質を背景としてコントロールしていた。このシステムは飢饉や自然災害の時には機能していたが、近年になって派閥意識が村のパワー・ストラクチャーに入り込むにしたがって崩壊していった。マタボールはいまだに村では責任ある地位にあるとはいえるものの、それは彼自身の能力によるものではなく、派閥との関係によって支えられている傾向が強くなってしまっているようだ。しかし、これでいいのかという村びとの声をよく聞く。まさに、「タウト」ではない「公」としてのマタボールたちの役割が期待されているのである。

IV アクション・プログラム

D村のマタボールたちの活動は、コミュニティ・デベロップメント・アプローチによる農村開発の手法に対する「手がかり」を提示してくれる。D村のマタボールが積極的にリーダーらしい役割を果たしてきたのは、「村意識」に訴えた「公の権威」が発揮されるプログラムにおいてである。これらの活動は、村びとたちの「公益」(common interest)を引き出していることに特徴がある。また、マタボールの「タウト」化を防止したのは、「彼らだけが知り得る情報」を「一般の村びとも知ってしまう」という単純な事実によってであった。ここに、「村意識」と「村びとへの情報の公開」という2つのキー・ワードが見えてくるのである。ここで思い返してみたいのは、村の裁判所であるビチャールは、決して密室では行われえないという暗黙の了解があることである。多くの場合、村びとの誰もが参加できる「公の場」で行われる。屋敷地の庭や学校、モスクの前などの「人目につく場所」が選ばれ、皆に認められたマタボールたちが皆の面前で話し合いをするという「在地の制度」ができあがっている。この「在地の制度」と上記2つのキーワードを端緒として、「村落委員会」と「回覧板と掲示板」という「制度」を導入するとともに、いくつかのアクション・プログラムを実施していくことになった。ここでは、村落委員会の設立と行政とのリンク及び掲示板・回覧板、村落連絡会議、道路整備を取り上げて検討する。

1. 村落委員会の設立

マタボールたちが村の「公」として農村開発に参加する組織としては、D村ではすでに彼ら「自前の制度」である村落開発委員会が設立されていた。しかしこの委員会は、マンドゥリア(南パラ)とチャムリア(北, 中, 東のパラ)にそれぞれ独立して存在していた。

ドッキンチャムリア村の村落開発委員会を2つにするのか、統合して1つにするのか、この

ままの形でやるのか、あるいは新たに設立し直すべきなのかの問題が生じた。JSRDE に先行する JSARD の研究調査においては、マンドゥリアの人々は JSARD を何か怪しげなものと理解していたようで、当時、筆者らは彼らの十分な協力を得ることができなかった。彼らは自分たちの不利益になりそうな情報を正確に伝えることを拒んだのである。また、地理的にも離れているので、チャムリアの人々と交際することはあまりなく、大きなピチャールの場合だけ助けを求めることがあった程度である。しかしマンドゥリアの人々は JSRDE には興味を示してくれ、またチャムリアのマタボールたちの判断もあり、結局、1つの委員会の設立を目指すことになった。

1989年以降、委員会のメンバーはマタボールのほぼ全員を取り込むという形式に拡大されてしまっており、チャムリア村落開発委員会は21人、マンドゥリアでは13人という多数となっていた。総勢34人の委員会では実質的な活動は期待できないという判断を筆者らはもった。JSRDE の村スタッフの主任（マネージャー）であり、かつ、マタボールでもあるアッケル・アリを中心に、他の村のスタッフ4人（内一人は女性、男性の一人は隣村の人、他の二人はD村の人）と何度か相談をもつとともに、D村のマタボールたちの意見をそれとなく聞く努力をつづけた。

その結果、村落開発委員会のメンバーの数は10～15人の小規模で機能的なものにすることがまず決定された。次に構成メンバーとその選出方法を決定しなければならないが、これに対してアッケル・アリにより、次のような素案が作られた。

パラ	人数	名前	職業／地位
南	4	1 ジャラウッディン	マタボール
		2 アブドゥル・ハイ	〃
		3 バドショ・モンドール	〃
		4 ハミッド	土地無し農民組合マネージャー
東	2	1 カリルール・ラーマン	篤農家
		2 ヌルル・ホック	ビジネスマン
中	4	1 ハビブール・ラーマン・マスター	農民協同組合マネージャー
		2 アヌワール・フセイン	ユニオン評議会メンバー
		3 ハミッド	青年層（ユースクラブ）代表
		4 アッケル・アリ	JSRDE ビレッジ・マネージャー
北	3	1 アヤット・アリ・ムッラ	マタボール
		2 マイエン・ウッディン・マスター	教師
		3 アフザール・ムッラ	マタボール

この素案はパラ間のバランスを配慮するものでもあったが、むしろ、マタボールたちの職や地位を考慮したものであった。しかしこの案に対して、職や地位がマタボールたちに「権威」を与えているのかという疑問が出された。「権威」を与えている、または認めている人々の「集団」の中でのみ「権威」が機能するのかが問われたのである。例えば、協同組合のマネージャーといえども、マタボールとしての「権威」は協同組合という「集団」が与えているのではなく、基本的にはパラに住んでいる人々が与えているという「事実」が確認された。一般の村びとにとっては、これらの人々は、パラにおけるリーダーシップを代表する存在であると理解されているのである。

次に、これらのマタボールが名実ともに村の「公」となるためには、選挙であれなんであれ、手続きという「儀式」が必要である。どのような手続きをとれば、インフォーマルなマタボールたちの権威が、正式に村を代表するものとなるのかに頭を悩ますことになった。プロジェクトの遂行だけを考えれば「任命」が手っ取り早いですが、それでは村びとたちの自主性が損なわれてしまうことになる。

形式的な民主主義の立場で委員会の委員を選ぶ場合には、一般的には人口比で地域を割るという方法がとられる。村の総世帯（カナ）数は538（1992年）であり、ほぼ40世帯から一人の代表者が出れば、ほぼアッケルの素案どおりの人数比の委員が各パラに割り当てられることになる。この方法で代表者を選べば、ドッキンチャムリア村の新しい委員会は13人で構成されることになる。しかし、もし決められた40世帯から機械的に一人の委員の選出という方法を取った場合には、パラのリーダーであるマタボールが選ばれる保証はない。この40世帯というのは、この村において「社会的な単位」となっておらず、40世帯が一人のマタボールに「権威」を与えている「集団」ではないのである。また、これは委員会の委員を無作為に選出することに通じ、村びとに認められている「村の代表者」を選ぶことを邪魔しようとする「タウト」や村の「嫌われ者」を喜ばすことになるだろうとの意見も出てきた。村びとに認められているマタボールたちの助けがなければ、プロジェクトの目的を村びとの中に浸透させることは困難で、試みはすぐに挫折してしまうとも考えられる。こうして最終的には、真のリーダーを支持し、まがいもののリーダーを批判するであろう村びとたちによる正式な集会（ショバ）により、委員を選出すべきであるという結論に達した。

委員会には女性の委員も必要であるという判断から、各パラから1人ずつの女性委員を選出することになった。この女性の選出については、適当な基準もなくまたその正当性についても問題はないと考えられたので、パラの人々による選出にまかせることになった。また委員数については、最終的に、男性13人（北4，中4，東2，南3）と女性4人（各パラ1）に決まった。

委員会のポストの構成をめぐる様々な話し合いがもたれた。BRDB系の協同組合の運営

委員会のやり方も参考にされた。7, 9, 11のように奇数の委員を選び、その中から委員長を選出するという方法であるが、結局、選出に関してはすべて村びとの集会で決定することに決まった。D村のマタボールたちがよく使う「ハウズ・テケ・コタ・アシュテ・ホベ（集会に参加している人々から話がはじまらなければならない）」という集会の慣例に従うことになったのである。

村びとによる全体集会（グラメル・ショバ）が1993年1月12日に小学校の大教室で開かれた。昼間だというのに200人近い出席があった。集会ではまず「この集会の議長」が決定された。実に感心させられることであるが、D村では、大抵の集会では議長選出の手続きがまずはじめにとられる。集会に人が集まっている状態をハウズというが、ハウズの誰かが（誰でもかまわない、決まっていはいない）、実にタイミングよく「議長を選出しよう」という声をあげる。それに呼応するように「〇〇氏にやってもらおう」という声が一方であがり、「承知した」「それでいい」という声があがる。この日もハウズによる議長選出からはじまった。「（この集会の議長は）ムツラ氏がいい」という声があがり、ハウズが認めて、この集会の議長にはムツラが選出された。プロジェクトからD村村落開発委員会に関する説明が行われた後、設立および委員選出の議事が進められた。

プロジェクトとしてははじめに委員長、書記の人選が行われたほうがよいという判断であったが、13人の委員の選出がまず行われ、ハウズからの推薦の声を皆が認めるというやり方で進められた。パラの委員はパラの人が推薦することになり、4人の女性委員も選出された。そして、もっとも重要なポストである委員長、書記長の人選に入ると、南パラのマタボールのジャラウディン（委員に選出されている）が委員長としてムツラの名前を出した。アッケル・アリが二人の副委員長を推薦することを提案し、カリルール・ラーマンとマフィズール・ラーマンが副議長のポストに推薦された。また、マイン・マスター（委員に選出されている）がプロジェクトに関係が深いということでアッケル・アリを書記長に、またムツラがモハメッド・ハミッドを委員会の副書記に推薦した。ハウズの村びとは手を挙げてこれに応えた。ほぼ全員一致でD村村落開発委員会が成立した。プロジェクトからは積極的な働きかけをしなかったにも関わらず、ほぼ当初の予定通り下記の人々が委員となった。村のマタボールたちがまさに名実ともに村の「公」としての代表者となったのである。なお、当初「村落開発委員会」として発足した委員会は、後に「村落委員会」と名称を変更した。

	名前	職責	住居
1	モハメッド・アヤット・アリ・ムッラ	委員長	北パラ
2	モハメッド・カリルール・ラーマン	副委員長	東パラ
3	モハメッド・マフィズール・ラーマン	〃	南パラ
4	モハメッド・アッケル・アリ	書記長	中パラ
5	モハメッド・アブドゥール・ハミッド	副書記	〃
6	マイユン・ウッディン・マスター	メンバー	北パラ
7	アフザール・ムッラ	〃	〃
8	コルシェッド・プラマニック	〃	〃
9	ハビブール・ラーマン	〃	中パラ
10	アヌワール・フセイン	〃	〃
11	ヌルル・ホック	〃	東パラ
12	アブドゥル・ハイ	〃	南パラ
13	ジャラウッディン	〃	〃
14	ライリー・ベゴム	〃 (女性)	北パラ
15	マモタズ・ベゴム	〃 (女性)	中パラ
16	ナズマ・コンドカール	〃 (女性)	東パラ
17	レヌー・アクタール	〃 (女性)	南パラ

村落委員会は、村で展開される農村開発関連の事業の発掘と指導、村びとの利害調整を行うことによってそれまでの村落開発委員会の活動を継承するとともに、これまでインフォーマルにマタボールたちが行なってきた村外に対する「窓口と交渉」の機能を担っている。したがって、村落委員会とは、「具体的な村の代表であり権威」という位置づけができる。今後のプロジェクトの計画は、すべてこの村落委員会の承認を得るとというのが原則である。

さらにプロジェクトでは、村落委員会の決定事項や、後述する行政サービスが村で実施される日時などを一般の村びとに知らせるために、隣組グループであるバリ・グループを組織し(詳しくは、本特集の吉野・セリム論文 [1995] を参照のこと)、回覧板・掲示板という「情報伝達システム」を導入した。

2. 行政サービスと村のリンク・モデルの模索

(1) 行政サービスと村のリンクをどう考えるか

D村で実際に「行政サービス」(行政の責任で「国民」に展開されるサービス)を伝える担い

手は、フィールド・アシスタントと呼ばれる村々を実際に回り村びとと接する補助役人と、彼らの業務を指導・管理するオフィサーと呼ばれるタナ役所の役人である。先に述べたように、彼らの村での仕事は「村の案内人」としての村のリーダーと会うことから始まり、彼らとリーダーは個人的なつながりを維持し続ける。つまり、現行の行政サービスの村での伝達において、リーダーはサービスの直接の受け手、または中継者として「重要な村の代理人」の機能を果たしている。

行政のサービスがリーダーによって受理され、「一般の村びと」に伝達される具体例は、農業普及サービスにおけるコンタクト・ファーマー（技術普及対象農民）の選出、政府系（BRDB: Bangladesh Rural Development Board, バングラデシュ農村開発公社）の協同組合の村での創始者、融資や灌漑ポンプの補助金の受取人、救援物資の受取人などである。これらサービスの受益者の選択において、リーダーは私的な関係のある「一般の村びと」を優先的に選択するかあるいは自らを選択し、行政側に通達する。したがって、私的な関係にない「一般の村びと」は、行政から通達された結果を噂で耳にするか、実際にサービスが村に届けられた時に初めて知ることになる。また、サービスが届いたことも知らされないことも珍しくない。例えばあるリーダーは、組合のマネージャーの地位を利用して代表者として融資を受けたが、申請者名簿に名前のあった他の組合員はそのことを全く知らず、返済勧告を受けて初めて知るところとなり、現在も大問題となっている。

役人が村へおもむき、あるいは役所に呼びつけることで、リーダーに行政サービスの受益者の選出を依頼する。少なくとも、リーダーは行政に積極的にアクセスしようとする村びとであるから、表現は適当ではないかもしれないが、行政に対して「積極的な支援者」といえる。行政は彼らをつかまえておけば、後は何もすることはない。どのような経過で選出されたかにも目をつぶる。行政にとっては過程が問題ではなく、条件を満たす結果が問題なのであるから、これは行政側には問題にならない。実にうまく行っているのである。これほど行政サービス伝達において効率のよいシステムはないのではないか。ただ、一部の人にしか知らされていないという村びと側の問題を、「困ったことだ」と考えるかどうかである。

行政のサービスと村のリンクは、「システムの効率」の他にも行政サービスの質の問題として捉える必要がある。とくに、新しい技術や知識（新品種や農業技術という狭い捉え方ではなく、家族計画、予防接種なども含める）などの「普及型の行政サービス」が質的に村びとのニーズを満たしていない場合には、たとえサービスの存在を村びとが知らされたとしても、一般の村びとは無関心を装う。また、新しい試みに対しては、まずはその結果を見守ろうというのが一般的な姿勢である。一部の人にしか知らされず、その人たちが受益者になると表現すると、さも受益者は利益を独占している悪者と捉えられがちだが、見方をかえれば、そういう受益者は行政サービスの質に対するフィルターであるとも考えることもできる。「質のいいサービスは必ず

村びとに定着する」という村びとの判断に信をおくならば、現行の行政サービスの伝達システムは、「定着化への時間」さえ問わなければ、それほど困ったことではない。まがりなりにもリーダーたちは、自らの意志で必要だと感じた行政のサービスに積極的にアクセスし、「タウト」となることで行政サービスの「試験台」になる役割を果たしている。あくまで結果としてであるが、一般の村びとたちは、無視ないし拒否という態度によって、行政サービスの質を問える機会が与えられているのが現行のシステムであろう。幸いなことに、バングラデシュの政府は、現在のところ「普及型の行政サービスの押し売り」（「質」を問える村びとの権利の剝奪）をしていないが、そうならないとも限らない。一時期、家族計画における避妊手術の強制が話題にあがったこともあったが、これも「行政の押し売り」が産みだした問題であったと捉えれば理解しやすい。

行政サービスと村のリンクの現状から、1)「行政の押し売り」を防げるリンクのシステムであること、2) リーダー以外のやる気のある村びとも行政サービスにアクセスできる機会を与えること、3) 村びとのニーズが役人に伝わるべきこと、という課題が見えてくる。また、筆者らの農村開発の手法は村意識を基盤とするものであり、村意識が育つことは望ましいと考えている。したがって、4) 村意識を育成できる行政サービスの伝達システム、という課題が追加されるのである。

(2) 月例村落連絡会議の試行

以上の課題に取り組むために、アクション・プログラムの1つとして月例村落連絡会議を1993年1月24日からはじめた。

連絡会議は、村落委員会事務局（プロジェクトの村スタッフが兼務）によって開催され、BRDBのTRDO（Thana Rural Development Officer）の指導のもとに会議が進められている。会議の議長と書記は、村落委員会の委員長と書記と同じ顔ぶれである。すべての村落委員会の委員と、バリ・グループの代表者であるシェボック（男性）、シェビカ（女性）が招待される（[吉野・セリム 1995] 参照）。フィールド・アシスタントと呼ばれる補助役人たちと非政府組織（NGO）に雇用されているフィールド・ワーカーが出席する。その構成は、農業普及（男1）、保健（男1）、家族計画（女1）、家畜（男1）、協同組合（BRDB系：男1，女1）、インフラ整備（男1）の各部局の補助役人7名（男5，女2）とNGOであるショニルボールのフィールド・ワーカー1名（女）、ユニオン評議会の書記官1名（男）、ワードから議員1名（男）である。

会議は毎月第1木曜日、午前11時から小学校の教室で開かれる（1994年の雨季からはプロジェクトの援助と村びとの土地の提供によって建てられたD村集会場で行なっている）。会議ではフィールド・アシスタントとフィールド・ワーカーが、この1カ月間につけた業務日誌（フォー

ムはプロジェクトから支給)をもとに活動を報告するとともに、今後1カ月間の村への来訪予定とサービスの内容、彼らの事務所で今話題となっていることなどが発表され、村びとに知らされる。

会議で「公」になった情報は、ショングバードと名付けられた号外に刷られ、村びとに配られる。ショングバードはA4サイズ1枚か2枚に印刷された簡単なニュース紙で、JSRDEの村の事務所によって作成される。それは各パラ、小学校、ハットにある掲示板に掲示される。掲示される以外にも回覧板によって各バリ・グループの代表者のもとに届けられ、グループ内に回覧される。

この連絡会議のアクション・プログラムでもっとも印象的な出来事は、先月村に来ると言っておきながら来なかったフィールド・アシスタントや、通りいっぺんの報告しかしないフィールド・アシスタントに対して、村落委員長で連絡会議の議長であるムツラが、強烈な批判をはじめたことであった。フィールド・アシスタントには毎日の業務日誌つけの仕事代と会議出席の謝礼として、旅費330タカ/月(1タカ=約2.6円、1994年11月)がプロジェクトから支払われている。これが村落委員会の知るところになった。連絡会議の初期の頃の数回は、委員長や委員も黙っていたが、ある日の会議で委員長のムツラが「プロジェクトからの手当をもらっているにもかかわらず、なんと不真面目な……」と厳しい批判の論陣を張ったのである。

これには伏線があり、村落委員会の委員たちは「なぜフィールド・アシスタントやフィールド・ワーカーたちだけが日当がもらえて、我々には一銭も払われないのだ」という不満を抱いていたのである。この不満は村で生活していた筆者らにも寄せられた。確かに言われてみればそうかもしれないが、プロジェクトとしては委員たちへの手当支給だけは避けたかった。仮にこの村落委員会がうまく行った時に「金で彼らを釣った」と言われたくはなかったことと、この連絡会議は村落委員会の仕事であり、彼ら自身の仕事であるという自覚を促したくもあった。また、彼らのマタボールとしての村の「公」の自覚を信頼したかったのである。プロジェクト関係者による説明が粘り強く繰り返された。

マタボールたちはプロジェクト側の一貫した態度に理解を示し、プロジェクトから支給されるフィールド・アシスタントたちへの旅費を「公金」と位置づけることで、一応は納得したものの、「公金横領」とでも言わんばかりの批判を展開し始めたのであるから、彼らもたまったものではない。この日の会議を境に、フィールド・アシスタントたちの一方的な発表に対して、村落委員会の委員たちが反応し始めた。恐らく、委員、とくに委員長のムツラには、自分たちの資金が彼らの旅費となって支給されているという意識があったのではないかと思われる。対話という形式で、行政サービスに対する村びとによる本格的なモニタリングがはじまったのである。村落委員が毎日直面している問題が話題としてあがった時、その「対話」は一気に活発となった。

例えば、雨季には洪水によってホテイアオイが運ばれ、それが深水稻であるアマン稲に被害を及ぼすが、この駆除のために使える費用としてタナからユニオン評議会に TR (Test Relief) という名のプログラムで資金援助があるらしいとユニオン評議会の議員 (D村の属する選挙区から選ばれた議員は連絡会議の一員である) が報告した時には村びとは熱心に聞き入り、また、ヤシの木の生育が悪いが何とかならないかなどの栽培技術上の問題や牛の病気が流行っているがどうしたらいいのかといったような問題でもそうだった。村の人たちは、生活の身近なところで行政サービスを欲していることが明らかになってきたのである。

フィールド・アシスタントたちの訪問日程は、連絡会議が設置される以前は村びとのもとへあまりよく届いていなかったが、連絡会議と回覧板、掲示板の「情報伝達」システムが機能しはじめたためか、村びとの行政サービスへのアクセスもよくなっている。家畜局のフィールド・アシスタントによって予防注射を受けた牛は、1993年9月11日には約100頭に及んだ。このように、これまで村に來ているかいこないか分からないような存在だった行政サービスは、徐々に目に見えるものになりつつある。

1994年11月に入り、村落連絡会議も23回を数えるに至った。マンネリ化したということもあろうが、農作業の仕事の忙しさなどに左右されて、村落委員やバリ・グループのシェボック、シェビカの会議への出席率は決していいとは言えない。とくに最近では、回覧板は実際に回されていることも少ないように見受けられる。今後は、こういう点をどのように改良していくのかが問われている訳であるが、村落連絡会議のアクション・プログラムを開始するに当たって掲げた4つの課題は、徐々にではあるが、着実に達成されつつあるという手ごたえを感じている。

本稿では触れないが、この村落連絡会議の経験を活かし、行政サービスと村のリンクを1つの村ではなく、行政の最小単位であるユニオンを対象に広げようというリンク・モデルを模索中である。この試みは1993年8月から10月の予備期間の後、現在も実施されている (詳しくは [Ando 1994] を参照)。この試みについては稿をあらためて報告したい。

(3) 回覧板と掲示板の持つ意味

情報の伝達方法として掲示板と回覧板を使っている。当初、これらの媒体を用いることを村びとに説明した時には、村びとの70%以上は文盲である村の現実では、文字で情報を伝達しようとするのは無理ではないかという質問が、とくに村の知識人から出された。この疑問は当然なことであり、以下に筆者らの考えを簡単に述べておこう。

情報は多くの場合個人のチャンネルを通じて村に入り、口コミで広まる。この情報流布のシステムは個人的なものであることと、最初に情報を得た村びとによって簡単にコントロールされてしまうのが特徴である。このことは農村開発に関する情報についても言える。情報が口コ

ミという「目に見えない形」によってリーダーの私的なネットワークに入り込んでしまうことで、ネットワーク外の人々の情報へのアクセスを悪くし、結果として、農村開発プログラムへの参加の機会を不公平なものにする。

情報を文字にし、回覧板と掲示板という「目に見える形」に変えることは、情報が村に入ってきたことを人々に具体的な「形」によって知らせることであり、情報の私的ネットワークへの流入をまず防ぐ。次に、文盲の人々さえも、回覧板や掲示板の存在により情報がやってくることを自分たちの目で確認することができれば、情報を知ろうとする意志が人を動かすようになる。知ろうとする意志こそが、村における「情報の公開」を可能にする。文字を読めるか読めないかは二次的な問題である。回覧板と掲示板に文字で書かれた情報を文盲の村びとたちが直接的に理解できるとは、筆者らも考えてはいない。

問題は、文字を読めない人にとって文字情報を伝える掲示板や回覧板が無意味であるとする「常識」にある。情報が運ばれてきたということを人々が知り、情報に興味を抱けば、口コミという在地の情報伝達システムの欠点は長所になる。

文字情報は人と人との会話を必要としないことで、情報の「公性」を保ちやすいが、自ら他人とのコミュニケーションを交わさなくてもよいという面では消極的な情報伝達方法であると言えよう。口コミは自分から言葉を発することにより他人と会話を交わし、確認をしながら情報を伝達するという積極的な情報伝達方法であり、ネットワークを育てるのである。掲示板や回覧板が契機となり、文字を読める人に尋ねるといった積極性を文盲の人々の意識に芽生えさせることは、ネットワークの延長上にある「村意識」の育成につながる。そして、知りたいという積極性は、行政サービスなどの農村開発プログラムへの参加意識を高める可能性を秘めている。

(4) リング・カルバートの設置と労働奉仕（セッチャ・スロム）

農村インフラ整備におけるD村のマタボールたちの長年の夢は、自分たちがはじめたハットから約3 km離れた幹線舗装道路までの間の粗末な土道を、雨季にでも3輪リヤカー（荷物運搬用人力車）や小型トラックが自由に通れるようにすることである。この道は、雨季の洪水を通すためにD村内で約15 mの長さで途切れ、ボロ・バンガ（ボロは大きい、バンガは道の崩れたところ）となっている。このボロ・バンガは土で塞ぐことはできないので橋が必要となるが、その建設費はざっと見積もっても50万～70万タカ（150万円～210万円）とのことであった。プロジェクトのD村サイトにおけるインフラ整備の年間予算規模は約10万タカであり、手が届かない。そのため、この橋の建設は、バングラデシュ政府がCAREの資金援助を受けて行なっているプログラムでやる以外には実現の可能性は少ないとの結論に達した。プロジェクトとしては、CAREが設けている橋の建設のための条件を満たすために、途中の他のバンガに通水用の

リング・カルバートを建設することになった（本特集の〔内田他 1995〕を参照）。

カルバートの建設計画として、プロジェクトからカルバート購入経費と設置に要する全額（98,600 タカ）を支給し、それに対して、D村の村びとが労働奉仕によって道路の切り崩しと土盛りを行うことを村落委員会に提案した。この計画は1993年1月30日の臨時村落委員会で正式に認可された。1993年2月12日（金）のジュマのナマジ（イスラムの金曜日の昼のお祈り）の後に、村落委員全員が村びとたちを伴い、リング・カルバートの設置予定地におもむいた。仕事ははじめに皆でアッラーに祈りを捧げ、ムッラによりコグル（ベンガル鋤）の最初の一鋤が打ち込まれると、さながらお祭りさわぎのように総勢50名以上の人々が、鋤で道路の土を崩す役とその土を竹籠にいれて運ぶ役に分かれて、仕事が始められた。順調に事は運ぶと思われたが、半分ほど進んだ時、ある青年兄弟が両手を広げて作業を止めに入ったのである。彼らはモヘラ村の住民で、設置されるカルバートの排水口となる側の土地の所有者であった。

「困るんだ。やめてほしい」と言う彼らの言い分は、こうであった。彼らには2筆の田しかなく、一筆は橋がかかる予定のボロ・バンガの所にあり、雨季にはもろに洪水の流れ道となる。そのために雨季の深水アマン稲は大変な被害を受けている。その上、残りのもう一枚の田までがカルバートの排水口となり、洪水の流れ道となれば、雨季の稲作は望むべくもない、というのである。

もっともな意見なのだが、カルバートの設置場所はどこでも良いというわけではない。1987年、1988年の大洪水の際に、水の流れの圧力によって2度も同じところが崩されたバンガにカルバートを設置すべきであるとの意見は、村落委員会の委員たち、この種の仕事を請け負っている地域のコントラクター（土建屋）及び農村水文学的調査を実施していたわれわれも村のプロジェクトスタッフらも共通の認識をもっていた。また、ここにカルバートを設置しないことには、橋ができたとしても橋が洪水の水圧に耐えることが難しいという皆の認識も働いていた。すったもんだの末、彼の言い分が認められ、カルバートを彼らの田の西の端に移すことに決まった。隣の田の畦を挟んで、排水口が両方の田に $\frac{1}{2}$ ずつかかるようにしたのである。

この兄弟の兄の方に新たに鋤入れをしてもらい再びお祭りが始まったが、もうすでに日は傾いており、この日はたいして作業を進めることができなかった。次の日からは少数の人が短時間の労働奉仕に出ただけであった。これではいけないと、労働奉仕の提案者であり村に住みこんでいたわれわれが午後の1時間ほどの労働奉仕を行い村びとを誘ったが、いかほどのデモンストレーション効果もなかった。労働奉仕であるセッチャスロムは、どうやら勢いとお祭り気分で作るものらしい。それでもマタボールである村落委員に割当てられた労働奉仕動員のノルマにより、細々とながら3日間は作業は進んだ。しかし、また例の兄弟の阻止が始まったのである。それは2月17日のことだった。もうこうなると、労働奉仕どころではない。白けムードが漂いはじめた。

プロジェクトの村スタッフの主任であり村落委員会の書記長でもあるアッケル、副書記のハミッド、委員長のムッラは危機感を持ってモヘラ村のマタボールたちとの交渉に入った。18日、モヘラのマタボールであるトラフ・アリ先生の屋敷地で話合いがもたれた。タナのエンジニア部門のフィールド・アシスタント、当の兄弟の兄、トラフ・アリ先生、他数人が顔を揃えたというが、結局話し合いではさしたる結論に至らなかった。この時の交渉の場には、村の部外者である筆者らは敢えて参加しなかった。筆者らが表にでることで話がややこしくなるのを恐れ、ムッラらの活躍を見守るのが一番よいと判断したのである。

膠着状態が24日まで続いた。D村の村びともマタボールたちも、もうすっかり労働奉仕のお祭り気分の熱は冷めてしまっている。打開策が検討された。D村だけの圧力ではモヘラ村は動きそうにないと判断したアッケルやムッラは、カルバートの恩恵を受ける隣村バニアホイルのマタボールたちの「権威」をも動員することにした。24日、アッケルがユニオン評議会のチョキダールに依頼し、モヘラ、チャムリア、バニアホイル村のマタボールたちに、26日(金曜日)のジュマのナマジの後、カルバートの設置予定地にて協議を持ちたいとの知らせを送った。26日の午後、3つの村のマタボールたちと村びとたちが問題の場所に集合した。集会(ショバ)が始まった。しかし、依然として地主のモフィズは承諾しなかった。

話し合いの中でモヘラ村のあるマタボールが「作物被害への代償として300タカ支払うべきだ」と発言した。すかさず村落委員会の委員長であるムッラと書記のアッケルが「分かった。支払おう」と応えたことで、この問題は収拾した。アッケルから地主に300タカが支払われ、その後、リング・カルバート設置の工事を請け負ったモヘラ村のコントラクター(土建屋)が数人の人夫を使って道路を崩しはじめた。コントラクターによれば、労働奉仕だという。実際、プロジェクトからもD村の村落委員会からも賃金は支払われていない。当初、リング・カルバートの設置は製造を依頼したタンガイルの町のコントラクターがやるはずであったが、途中から、この話を聞きつけたモヘラ村のコントラクターの要望を入れて、また隣村のよしみということもあり、村落委員会の議長のムッラの努力で設置の仕事だけは彼らに回したという経緯があった。したがって、「労働奉仕」が要求されたものか、仕事の進展と義理に感じてコントラクター自ら進んで申し出たのかは筆者らの知るところではないが、大いに助かったことはたしかである。また、この「労働奉仕」の他にもD村の村びとによる労働奉仕が2日間行われ、ようやくにして3月2日に工事は完了した。

リング・カルバートは、この他にもモヘラ村に1カ所設置された。また、CAREの条件を満たすためには、橋が建設されるところまでジープが入れるようにし、バンガの幅は12m以内としなければならない。リング・カルバートの設置や道路の部分的拡張とバンガの幅を狭めるための土盛り作業は、本来、モヘラ村とD村の村びとによる労働奉仕によってなされるべきという条件つきであった。しかしD村内でのカルバートの設置で予想外のつまづきに遭い、また、

2月23日からイスラムの断食月に入ってしまったので、労働奉仕によるお祭り気分はすっかり吹き飛んでしまった。一方で、CARE へのプログラムの申請にともなう検査がタナの PIO (Project Implementing Officer) によって行われる期日が迫ってきたので、とりあえず人夫賃をプロジェクトから出し、道路の修復作業はひとまず1993年3月16日に終了した。その後、後追いの様に D 村の各世帯から 5～10タカずつ集めることが村落委員会によって決定されたが、「すでにプロジェクトが出したのに、なぜ寄付なのか」という心理が働き、寄付は思うように集まらなかった。全額8,250タカの経費の内、実際には1,744タカ集まっただけである。これをどう評価するかは、プロジェクト仲間内でも様々な意見がある。実質的に約2カ月間（村落委員会を設立した1993年1月12日から1993年3月16日）の間に行なったこのプログラムは、労働奉仕という側面では、出鼻をくじかれたり断食月に入ったりした不運な面もあったが、あまり期待したほどの成果は上がらなかったと認めざるをえない [Fujita 1994]。

そもそも D 村一帯では、雨季にも冠水しない高く土盛りされた道路を使っている生活の歴史は古くはない。氾濫原地形をもつ D 村一帯では、交通の手段は雨季にはノウカ（小舟）によっていた。また、乾季には田の畦をつたい歩くことがついこの間までは普通であった。雨季にも冠水しない道路に D 村の人々が生活実感として馴染みはじめたのはほんのここ数年である。道との付き合いの歴史がないのである。歴史が文化を育て習慣を育てるとすれば、洪水の危機から堤防を守ったあの結束力が道路補修に発揮されなかったとしても、それは「当然な文化現象」なのかもしれない。このことは、村の青年クラブが演劇（ナトック）をやると言えば気前よく村から何千タカものお金が集まったり、貧しい村びとが手術をする時にマタボールが奔走して寄付を集めることにも通じる。演劇とチャリティの歴史は、道路よりもずっと古い。したがって、道路の補修への労働奉仕や寄付は、未だ習慣とはなっていない「新しい文化」と言えるのかもしれない。さらに、追い打ちをかけているのが導入されてすでに30年の歴史をもっている Food For Works である。政府（具体的にはユニオン評議会）が日当として小麦を支給することで人夫を雇い、道路建設や修理を行う。筆者らが労働奉仕を話題にした時、少なからぬ村びとから「どうして小麦をくれないのだ」という意見が聞かれた。道路は小麦によって作るものというのが一般の常識であった。政府関係者の出入りの多い JSRDE プロジェクトは、「政府」という意味での「公」であると村びとが見なしたとしても何ら不思議なことではない。村びとがプロジェクトに小麦を期待したのは、無理からぬことであった。

道路に関する人々の意識に焦点を当ててみれば、ムッラをはじめとする D 村のマタボールたちはプロジェクトの意向をよく理解して、奮闘してくれたと筆者らには思える。そして、寄付や労働奉仕以上に浮かび上がってきた問題は、農村道路などの土地に関するインフラ整備事業ではマタボールたちの調整的役割がますます重要になってくるということであった。道路やハットなどのインフラの波及効果は数村にわたることと、村を越えての土地の売買が進むため

に、村内の道路建設などにも隣村の村びとの利害が関係してこざるをえないからである。隣村の権威は隣村のリーダーたちであるのだから、彼ら同士が対話をしながら開発を進める重要性は今後増しこそすれ、減りはしないであろう。ここでも従来からの村の「公」としてのコミュニケーションのやり方に学び、それを制度化していく必要が感じられる。D村のマタボールたちによる村落委員会の設立は、まさにそれを視野に入れた「制度的アプローチ」の試みなのである。

様々な問題が付きないアクション・プログラムではあるが、農村道路整備は村びとの経済的自立を支えていく長期的な農村開発計画には欠くことのできないプログラムであるという視点に立って [ibid.; Ando 1994], カルバートの設置とそれに伴う道路整備プログラムは、D村におけるパラ内集落道路整備プログラムへ発展している。村落委員会の委員と、プロジェクトの村スタッフもこの仕事のコツが飲み込めてきたのか、道づくりに対する寄付額と労働奉仕の量から判断すると、着実な成果を見せつつある。¹⁰⁾ プロジェクトの残された期間内に道路の整備が「新しい文化」となるところまでは行かないにしても、バングラデシュの農村開発の手法に対して一石を投じることができればと思う。

V おわりに——「在地化した農村開発」をめざして——

JSRDE プロジェクトによるD村の農村開発の手法の基本的な特徴は、農村開発を担っていく村の組織を既存の村落社会としたことである。協同組合またはグループという新しい組織を導入することは敢えてしなかった。農村開発のプログラムの内容にもよるが、村落社会が持っているリーダーシップの活用が、もっとも無理なく一般の村びとを農村開発プログラムへ参加させる力となるということを、D村の村びとたちによる農村開発の歴史から学んでいたからである。

このD村での試みが、バングラデシュの農村開発手法を考える上で多少なりとも貢献できる点があるとすれば、在村のリーダーであるマタボールの可能性を引き出していくための具体的な制度やプログラムが、実践を通じて試行されつつあるということであろう。D村のマタボールたちが農村開発に果たしてきた貢献は、村びと個人の経済的自立を直接指導していくような具体的な経済活動を通してではなく、村の「公」としての「良識」と「権威」が果たす「役割」においてであった。つまり、村びとの「公益」(common interest)となるような農村インフラの整備や村の代表として行政府との接衝の窓口となるといったプログラムにおいて、彼らは村

10) 1993年7月から1994年6月に行なったD村でのパラ内集落道路整備プログラムでは、村から6,700タカの寄付金を集めた(労働奉仕をした場合には1日25タカとして換算)。プロジェクトは94,300タカを支出した。

をリードしてきたのである。かれらのこの分野での役割がもっと期待されていいと思われる。

マタボールたちによって行われている「ピチャール」や「村の集会（ショバ）」「隣村との調整」「情報の公開」などには、顔が見える小さな社会（地域）における「バングラデシュ型民主主義」の原点のようなものを感じることができた。恐らく、筆者らにはまだまだ知らされていない、村落社会が個性的に維持し、発展させてきた制度や習慣、技術などがあることであろう。村の外から関わる人はそこで学ぶ喜びを知り、村の内の人には自分たちのやってきた生き方に自信がもてるようになる、そんな農村開発の手法があってもいいのではないか。それは、「在地」という言葉で形容できる諸々のことを、否定することなく認めることから始まる。そして、そこから抽出できた「在地性」をプログラムの作成に活かすことが、新たな農村開発の可能性を生む。筆者らの試みは「在地化した農村開発」を目指す農村開発の手法へのひとつの提言である。

謝 辞

本稿で用いた資料は、国際協力事業団の研究協力プロジェクト「バングラデシュの農業及び農村開発に関する研究協力（JSARD）」（1986年から1989年）と「バングラデシュ農村開発実験（JSRDE）」（1992年から継続中）によって得られたものである。本稿の内容についての責任は筆者らにあり、国際協力事業団や他のプロジェクト関係者、特にタンガイル・チーム・メンバーの見解を代表したものではない。アクション・プログラムの実施にあたり、D村村落委員長のムッラ氏ほか委員の方々、JSRDEのD村主任アッケル・アリ氏とスタッフの方々、D村の人々、シャハデブプール・ユニオン連絡会議のメンバー、カリハティ・タナの役人諸氏、中でもBRDBのTRDO、ARDOの両氏、JSRDEの代表であるサレハ（Saleha）女史とJSRDE農村組織専門家のマザハルール（Mazharul）氏、JICA長期派遣専門家でプロジェクトのジェネラル・マネージャー野間晴雄氏、矢嶋吉司氏、元長期派遣専門家の赤松史朗氏、板垣啓子氏らにお世話になったとともにご協力をいただいた。また、タンガイル・チームの同僚であった藤田幸一氏（現農業総合研究所）、吉野馨子氏（元JICA専門家）、セリム（Salim）氏（バングラデシュ農科大学助教授）とは、現場で有益な議論を交わし、貴重な意見をいただいた。JSRDEのチームリーダーである京都大学東南アジア研究センター海田能宏教授には、貴重なコメントをいただいた。国際協力事業団の関係各位とともに、以上の方々に深謝の意を表したい。

追記 本稿脱稿直後の12月1日、ドッキンチャムリア村の村落委員会委員長モハメッド・アヤット・アリ・ムッラ氏が、心臓発作のため突然他界された。ムッラ氏の長年の業績を讃え、本稿を霊前に捧げたい。

引用文献

Ando, Kazuo. 1994. Overviews of Activities of JSRDE Tangail Site with Some Conceptual Proposal for

- Rural Development. In *Mid-Term Review of Joint Study on Rural Development Experiment Project*, edited by Md. Mazharul Islam *et al.* Dhaka : BARD & JICA.
- 安藤和雄. 1995. 「バングラデシュの農村開発の現状と援助」(1994年8月4日放送収録)『発展途上国産業開発論』河合明宣(編). 放送教育振興会.
- Fujita, Koichi. 1994. Towards a Long Term Strategy for Income Generation, Rural Institution and Resource Mobilization. In *Mid-Term Review of Joint Study on Rural Development Experiment Project*, edited by Md. Mazharul Islam *et al.* Dhaka : BARD & JICA.
- 濱嶋 朗; 竹内郁郎; 石川晃弘(編). 1993. 『社会学小辞典』(増補版). 東京: 有斐閣.
- JSARD Project Team. 1990. *Key Questions and Issues from Village-based Studies 1986-1989*. JSARD Publication No.20. Dhaka : JICA Bangladesh.
- 河合明宣; 安藤和雄. 1990. 「ベンガルデルタの村落形成についての覚え書き」『東南アジア研究』28(3): 92-106.
- 川喜田二郎. 1974. 『海外協力の哲学——ヒマラヤでの実践から』中公新書.
- Planning Commission. 1990. *The Fourth Five Year Plan 1990*. Dhaka : Ministry of Planning, Govt. of Bangladesh.
- Planning Commission *et al.* 1994. *Memorandum for the Bangladesh AID Group 1994-95*. Dhaka : Ministry of Planning, Govt. of Bangladesh.
- P. オークレー(編). 1993. 『「国際開発論」入門』築地書館.
- Saqui, Q.M.A.H. 1994. *Swanirvar Gram Sarkars in Four Villages of Bangladesh*. Dhaka : NILG.
- 内田晴夫; 安藤和雄; ムハマッド・セリム; アルタフ・ホセイン. 1995. 「農村水文学——バングラデシュの農村インフラ整備への新しいアプローチ——」『東南アジア研究』33(1): 66-81.
- 吉野馨子; ムハマッド・セリム. 1995. 「バングラデシュのバリ・ビティ(屋敷地)を通して見た農村開発」『東南アジア研究』33(1): 82-97.